

メロディあふれるクリスマスの夜に

石田衣良

みなさん、メリークリスマス!

2025年は、あなたにとってどんな年でしたか。今日はどんなお気に入りの新作ファッションで、クリスマスでにぎわう街を通り抜け、東京赤坂の素晴らしいコンサートホールにやってきましたか? 最初の質問にそうわくくない「普通」の年と答えられた人は、とても恵まれていたといえるほど、今年は陰しく厳しい一年でした。普通であり続けるだけでも、たいへんな時代なのです。

これほどおおきな変化は1989年ベルリンの壁崩壊以来で、今年は37年ぶりの世界史的転換点といってもいいかもしれません。しかもこれから世界はひとつになるという明るい希望にあふれていた前回とは異なり、世界はバラバラの破片に引き裂かれようとしています。

けれど、世界中で嵐が吹き荒れていてもコンサートホールのなかにまで、肌を刺す寒風は吹きこんでできません。美しいホールも素晴らしい音楽も、人の心の最良の部分を守り、温めてくれるシェルターの働きをもっているのです。この場に集うことができたみなさん、ほんとうによかったですね。

今日はせっかくのクリスマスのよき日です。世界の不安なゆくすえや、頑固で気の利かないパートナーへの不満や、いうことを聞かない子どもたちへの文句を、きれいさっぱりと忘れ、オーケストラの美しい音色とクラシックの名曲で、しばし心の肌の潤いをとりもどしてください。芸術だ、人類の遺産だと、その世界の住人はおおげさにいいますが、すべてのアートは「普

通」の人々を、冷酷で退屈な世界からエスケープさせ、ひとときの慰謝と感動を送り、より豊かになった心でもう一度元の生活に復帰させるといふ、素敵な使命のためにあるのです。ぼくもそのつもりでいつも小説を書いています。宣伝文句のようですが、アートによる感動には最高のお肌効果と大人になると急速に衰えやすい感受性のアンチエージング効果があるので、惜しみなくたっぷり全身で生のオーケストラの美音を浴びることをお勧めします。

さて楽曲紹介に移りましょう。最初の曲はナイジェル・ヘスの『クリスマス・オーバーチュア』。作曲家の名前を知らなくともぜんぜんだいじょうぶ。単一楽章で構成されたこの作品のなかでは、「ディンドン空高く」や「ひいらぎ飾ろう」「ウィ・ウィッシュ・ユー・ア・メリークリスマス」といった、誰もが耳にしたことがあるクリスマスの名曲が花束のように、つぎつぎとメドレーで華麗に流れてくるのです。どこにどのメロディが引用されているのか、耳を澄ませてクイズのように楽しんでください。

つぎはフランスの印象主義音楽の大家クロード・ドビュッシーの『ベルガマスク組曲』の第3曲「月の光」のオーケストラ版です。原曲は誰もが耳馴染みになっている幻想的で寡黙なピアノ曲。それを編曲のA. ラックがオーケストラならではの豊かな色彩と流麗な音色で、見事にアレンジしています。サントリーホールの空に伸びるストリングスのやわらかで羽のように軽やかな響きが目に見えるようです。音には重さがないけれど、色や香りや手ざわりがしっかりとあ

る。コンサートホールに通うようなみなさんなら、音は見えるし、美味しい水のように身体に沁みこむことをご存知だと思います。

さて、続いての曲にも「月の光」という通称がついています。おしゃれなユニゾンで曲をつなぎましたね。コンサートのプログラムを考えると、いろいろと気苦労はあってもなかなか楽しいお仕事かもしれません。英国の作曲家エドワード・エルガーの弦楽セレナードから第2楽章ラルゲットと第3楽章アレグレットです。この曲はチャイコフスキーやドヴォルザークと並んで、世界3大弦楽セレナードといわれたりすることがあります。クラシックの世界も御多分に漏れず、昔から「3大」ものが大好き。ビジネス上の理由もあって、3大交響曲や3大ピアノソナタといった題名のついたCDやレコードが以前はたくさん発売されていました。

すこし話がそれますが、みなさんご家庭でどんな機材で音楽を聴いていますか。ぼくからのお願いです。可能であればユーチューブやネットではなくフィジカル・メディア(懐かしのCDやレコードやカセットテープ!)で、それなりのオーディオシステムを組んで大好きな音楽を聴いてみてください。ステレオ機器は高価だし、かさばるし、重くて邪魔で、デザインも今ひとつですが、イヤホンやパソコンからは得られない素晴らしくリアル感のある音楽を届けてくれます。実はアメリカを超えて、日本はCD売り上げ世界第1位。これは誇るべき日本文化のひとつです。ゆとりのある音楽ファンは、サブスクではなく、ぜひCDを購入して、音楽家の助けになってください。あっ、そうそう紙の本も忘れずによろしく願います。

脱線しましたが、エルガーの弦楽セレナードは世界3大のなかでも、もっとも知名度が低いと思われる通好みの名曲です。なかでもとくに有

名なのが第2楽章の幻想的でやわらかな響き、実はこの雰囲気がドビュッシーのあの作品によく似ていると、多くの音楽愛好家が「月の光」と呼ぶようになったのです。英国の作曲家らしく、派手ではないけれど、しっとり落ち着いた弦の移ろいと重なりをお楽しみください。

さて、メインは今年もお馴染みの『くるみ割り人形』です。ぼくのリーフレットへの寄稿も3回目。この曲はすっかり新日本フィルハーモニー交響楽団のクリスマスの定番曲となりました。もう書くべきこともないくらいの有名曲で、メロディの美しさも折り紙つき。最後の「花のワルツ」を聴かなければクリスマスになった気がしないというファンも多いかもしれません。

モーツァルトには人生へのお別れの曲がいくつあります。ピアノ協奏曲27番、クラリネット協奏曲、最後の3大シンフォニー(おやまた3大が登場した!)、レクイエムなどで、どれも名作として有名です。ぼくはチャイコフスキーの別れの曲は、この『くるみ割り人形』と交響曲第6番「悲愴」だったと考えています。

『くるみ割り人形』のほうはサンクトペテルブルク帝室劇場監督セヴォロシスキー公爵からの依頼で作曲されたもの。頼まれ仕事で、すっかり手慣れた3回目のバレエ曲で、チャイコフスキーとしては観客動員も考えなければならぬ立場です。いってみれば、当てなければならぬエンタメ作なのです。ですが、こうした作品の性質上、音楽評論家や学者からの批判はゆるく、作曲家としてはのびのびと筆がふるえる楽しい仕事だったようです。そこで長年の作曲活動で磨きあげた技術の粋を尽くして、この華麗でキュートな傑作を、たくさんのファンのために自分でも楽しみながら書きあげたのです。幸福な仕事というのは、こういう作品のことをいいます。実際の公演でも評判は上々、

大ヒットを飛ばしました。

ちなみに公爵から支払われた依頼料は1000ルーブルだったといえます。1890年代のロシアの教員の月収が25ルーブルですから、現在の日本円にして1200万円ほど。もっとも当時のロシアでは都市のホワイトカラーの収入は、地方の農園労働者(ドストエフスキー作品でお馴染みの農奴です)より遥かに高かったということなので、もうすこし高額だった可能性もあります。どちらにしてもびっくりするほどリーズナブルですよ。作曲から130年以上が経過して、今なお世界中で愛されている名曲です。コンサートホールを何万回満員にしたのかわかりません。ショウヘイ・オオタニ並みの対価が支払われていても、まったくおかしくないのです。

チャイコフスキーは1892年に『くるみ割り人形』を発表し、93年に交響曲第6番を自らの指揮で初演し、その直後コレラにより53歳の若さで亡くなります。一般の観客への優しくてチャーミングなお別れが『くるみ割り人形』で、真摯な愛好家や音楽関係者への告別の作品がああ恐ろしい終楽章を持つ「悲愴」となりました。ちなみに第6番の初演の反応はといえば、型破りな結末部に聴衆が困惑し、冷淡なものに留まったといえます。当のチャイコフスキーは「自分のすべての作品のなかで最高傑作であり、もっとも誠実なもの」と評価していたのですから、芸術とその評価の関係は皮肉です。

異常なほど感受性が鋭く、人づきあいが苦手で、でも心根は優しく、いつもお洒落でハンサムな人。自分が生まれたロシアという国に馴染めず、ヨーロッパへのあこがれを持ち続け、世界共通である音楽の世界にだけ生きた人。ジェンダー問題について詳しくふれませんが、当時は法律上犯罪だった同性愛者でもあった。チャイコフスキーという作曲家をぼくがひ

と筆でスケッチすると、そんな人物になります。薄氷のような感受性も、とどまるところを知らない音楽的才能もなくて、とりえずよかった。あなたもぼくと同じように、安堵のため息をついたではありませんか。アートや才能というのは遠くから仰ぎ見るもので、直接手でふれるのはたいへん危険です。

最後の曲はドビュッシーと並ぶフランスの作曲家モーリス・ラヴェルの『ラ・ヴァルス』です。典雅なウィンナ・ワルツ風の開始は華やかですが、この曲は甘くありません。誰もが楽しく踊っているボールルームに、なにか暗い影が忍び寄り、すべてが崩壊していく。同じ作曲家の『ボレロ』が最後の一撃でクラッシュするなら、『ラ・ヴァルス』は優雅な社交の世界がゆっくりと溶け崩れていく構成です。深読みし過ぎるのはよくありませんが、初演は1920年。第一次と二次の大戦の戦間期で、作曲家の直感に近いつぎの嵐と19世紀的な旧き良きヨーロッパ文化の崩壊を感じとっていたのかもしれないのが、ラヴェルの天才性です。

さて、これでクリスマス・コンサートもおしまいです。イルミネーション輝く都心の街に戻り、美味しい紅茶でものみながら、今日の音楽の話をしてください。言葉が途切れる心配はありません。あなたのなかには今も音楽があふれ、数時間前より確実に心豊かになっているのですから。

(いしだいら・作家)

